

川本彰（明治学院大学）

「農業発展と村落におけるリーダーシップ」

(一)この報告は岐阜県高須輪中地区深浜部落が、昭和三八年に実行した大圃場・航空農業の実現過程を検討することによって、村落におけるリーダーシップがいかに行政と密着し、その密着によっていかにして農業発展が成功したか、ひいては村落のリーダーシップの在り方がいかに村落解体と関係するかということを明らかにしたい。主なる着眼点は次の通りである。

(二)東畑精一教授は、農民の企業者としての未熟性を「半生産者性」という言葉で表現している。これにならって、農民自身の不完全なリーダーシップを「半指導者性」と称しうるであらう。

農民は（この場合明治以降としておく）未だかつて完全なリーダーシップを担ったことはなかった。戦前においては地主が、戦後においては政府がリーダーシップをとって農業発展を遂行してきた。例えば現在、政府はそれこそヘリコプター農業から栄養食の普及、台所や風呂場の改善、産児計画まで農民の手をとり足をとって世話をやく。

一方、農民の方はどうか。農地改革は、村落成員の殆んどを自作農とした。かくて、自作農的な土地所有を基軸とする村落秩序の新

たな編成が確立するのである。だがしかし、その後の経済社会の変動の中で、農家生活の安定化は、当初の期待通りに進展せず、農民は激しい動揺と競争の渦中に入り込むことになった。加えて、確固たる指針をもたない農政の方向は、各種の補助金制度という弥縫策によって農民の要求に答えなければならなかった。その結果は、争って行政と密着しようとする農民の姿を現出させ、補助金行政と行政依存農業が対応することになったのである。

かくて、行政と村落リーダーの利害関係が一致し、行政側は行政のエージェント化した村落リーダーを通じて補助金を流し、彼らの立場を固めることによって、彼らをますますエージェント化する。一方、村落リーダーの方では村落結合を背景にして行政に近づき、自己のステイタスを高め、且つ自己の経営基盤を固めようとする。ここに村落リーダーの側に何んら村落結合を弱体化させる条件はなし。

(三)広域行政化は、ますます村落を行政の末端組織化する。行政は村落を把握して始めて可能である。しかし、農民のリーダーシップが確立していないから、行政は自らがリーダーシップの片棒をかつがざるをえない。ところで、本来、官僚はリーダーシップをとることができぬ。この矛盾はとくに土地改良事業、あるいは技術普及などを分担する現場技術官僚に顕著にあらわれる。

そもそも、官僚制の人間関係は外部と接触するとき、即物的な関係をもつにすぎず、人格的交流は許されない。しかし、現場官僚はまさに官僚でありながら、多くの関係が人格的關係に還元され、抽

象的客観的立場の許されにくい村落社会の場に立っている。そして人格と人格が対立する地元の調整を、一方、客観的即物的、一方、具体的人格的な立場を使い分けて行わねばならない。ここで官僚がとる農民指導の技術は、多く「操作」である。操作とはリーダーシップと似て非なるものである。リーダーシップにおいては、リーダーとフォロワーの間に何んら質的相違がなく、状況に応じて立場は交換可能である。しかし操作においては決して操作者と追隨者の立場は交換可能ではない。何故なら操作者は追隨者の自発的意志によつてえられたものではないからである。そこから当然、操作者は追隨者の深層心理にまでわけ入り、情緒的非合理的エネルギーをそれとわからせずに操作して自己の目的に同調せしめる。

官僚の立場は、決して農民と交換可能ではない。農民、村落についての知識、体験が欠けているほど一方的に自己の立場を深く内にひめて農民を暗黙の中にそれに同調せしめよとやる。強圧的という非難をおそれおそれるほど、自己目的を表面に押し出さず、農民心理を操作することによつて目的を遂行するのである。しかし、この方法は結局、集団における個人の未成熟という条件下のものであつて、未成熟を未成熟のままにとどめる危険がある。ここにも村落におけるリーダーシップが成長せず、そして村落結合を温存させる原因がある。

四) 七) もとも村落は二重構造を有している。第一には共同生活組織としての構造、第二には行政の末端機関としての構造。以上の両面から村落は行政に対して、常に不即不離の態度をとり、行政を丸の

みにしない性格が出てくる。構造改善事業においても基盤整備はいが近代化施設はごめんという態度もそこに理由がある。現実の村落のあり方もその両面の機能のバランスの上に成立している。

このバランスが維持される範囲においては農政の浸透、農業の発展と村落結合の強さは相関する。報告の事例においても、航空農業大園場制の成功も村落結合の強さがあつてであつた。